

三幕

サンチアゴ
讃血亞護騎士團長

モンテルラン 原作

井上廈 訳

第一幕

アルバロの家の廣間。背景全部は石ということがはっきりわかるほどすりへった裸の灰色と黄色がかった……と言うより濃い黄色の壁。「左手内側」(観客にむけて)嚴丈な鉄柵の入った窓があり、それを過して時々、雪のちらつくのが見える。

右手、背景の壁に一つの大きな十字架。胸の左の部分に刺繍ある大きな騎士團風の白絹のまんと、がその傍に、つかに百合の花の飾りのある剣と一緒にぶら下っている。全部サンチャゴ騎士團の騎士のものである。背景の壁の上に、三つの紋章の彫刻された中世の兜が懸っているが、突然吹いた風に叩きつけられ押し合いさせられた様に斜にかたむいてかけられている。その三つの兜は、裸の壁の中では無情な砂漠の中のオアシスのように立派で、又、少々そぐわないような感じで、風で一樣に揺れ動く時は、痙攣しているようでもある。

舞台中央に湯呑み茶碗七個と水差二個ののった小さな丸机。椅子が七脚。火鉢が一つ。

時折、遠くから鐘の音がきこえて来る。鐘については演出者に委ねる。があまり鳴らしすぎないように。そして第三幕の最後の中では鐘は鳴らされずならぬ。

第一場

マリアナ、ティア、カンパニダ

ティア 椅子は七つで澤山。今日は。ひよっとすると六人しか見えられないかも知れません

もの。先月八人しかおいでになりませんでしたよ。

マリアナ 今日では五人おいでになるって。こんなに雪が降って出ていらっしゃるも大変ね。

ティア 五人？　じゃあとの二人はどなたかしら。

マリアナ お父さまは前もって通知していらっしゃらなかったけれど急に集りに出たって言う騎士の方のために、いつも椅子は充分に用意なさるわ。

ティア でも、もうそんな方がいらっしゃるかしらねえ。あなた、みんながいらっしゃらないのは雪のせいばかりじゃありませんよ。騎士の方々をそうさせているのは別な冷めたさです。

他の騎士團みたいにサンチャゴ騎士國が勢ひをなくして来たのも、あなたのお父さまのお気持ちの中に熱い燃えるものがないせいです。あなたのお父さまを『サンチャゴの騎士團長』と人々が言っているのも別に理由のないことじゃないんです。騎士團長として打ってつけの方なのですわ。

マリアナ でも、二十五年前からイスパニヤの三つの騎士團の長は國王御自身よ。グラナダ王國がモール人を二度やつつけた時もすぐフレジナンド王は、大きな土地を持っていたいくつかの騎士團をつぶしておしまいになったわ。そして御自分が騎士團長になられたのよ。國王はちつとも騎士なんか必要じゃなかったの。それより勢の大きくなるのを怖れていらつしたわ。それを心配してらしたのよ。

ティア 今では軍隊みたいになってしまいましたものね。でもあなたのお父さまがいらつしやらなかったらアヴィラの騎士團のことなんか誰も知りますまいよ。

マリアナ 二年前、エル・パアウルルから帰る途中、イスラの陣地で一夜すごしたことがあったけど、くずれ落ちた御聖堂や、古井戸の上の草や、厩房うまやにつながれたロババなどが騎士たちの将来を豫言している様な気がしたわ。夜は夜ですべてをのみこむ暗いやるせない流れが私を眠れなくした……。

ティア 今日いらっしゃる方は五人ですよ。来月は三人。アルバロが今みたいなさつけないもてなしをしていたら尚更たしかだわ。どうして他の人のように夕食を出すとかなさらないのでしょうかねえ。

マリアナ お父さまは大切なことを相談なさる時に、なにかたべながらするなんて不作法だと思っていращやるのよ。主人は食事の時にみんなと一緒にしないというアラビアの慣しに感心していращやったわ。

ティア でも酒倉に酒がないというわけでなしそれに悪い酒でもないのにみなさんに水を
出すなんてねえ。それは水が清浄潔白を表わしているとあなたが一言ひになるのは知っ
ていますよ。 普の騎士の方々は、それで酒をのむのを気兼した・・・っていうことも。
マリアナ (湯呑みに水をつぐ) わあ！ きれい！ お父さまが騎士の方達かたたちに水以外の飲みも
のをお出しにならないわけが判ったわ！

ティア うっちゃつときなさいよ。病気になってしまいます。また、そんなに飲んで！ 外
が寒さで凍りついているというのに。

マリアナ 飲んでいるんじゃないの。食べているのよ。 わあ！おばさま。人が見たら火で
も飲んでいる様だって言うでしょうね。サン・ルカールの火かなんか。

ティア (呆れて) そうですとも。

マリアナ サンルカスの泉よ。だわね？ お父さまは一番綺麗な水を騎士の方達かたたちにのんでも
らいたいのよ。そうお思ひよ。(マリアナ飲む) うわあ。つ、め、た、い。この水の中に神
様がいらっしやるみたい。

ティア アラビア人は『腐つても鯛』と言ひますよ。なんてひどいほこりなんでしょねえ。
勿論イシドロ一人で、一時いっときに台所のことをしたり門番や家の中の掃除まで出来ないだら
うけど。 あなたのお父さまは一人でもなにかもやれると思っているんだらうかねえ。あ
なたのお母さんが元気だった時は、なにかもきちんとしていたものだったけれど。

マリアナ お父さまには縁遠いお話よ。

ティア あなたのお部屋は壁がすっかり落ちているし、修繕しようとも思っていないのか
ねえ。指が入るほどの穴もあるし、あなたはまるでがらくたの中で暮しているんですよ。
あなたみたいに綺麗な娘が！

マリアナ なんとも思っていられやらないわ。それに私にとっても別になんでもないこと
なんですもの。 一徹いってつな人ってみんなそうよ。

ティア じゃ何がどうってことあるって言うんでしょう。

マリアナ 心よ。御存知でしょ。お父さまには大切なことって心の中のことだけなの。

ティア 修道院じゃありやまいし。 そりゃあ修道院にでも行けば立派でいられるかも知
れない。 貧乏だ・・・なんて威張ってるけど貧乏なのは自分のせいよ。どんな人でも喰
べることについては考えて悪いって言うことはないのにね。

マリアナ お父さまは貧乏なのをかえって自慢していられっしやる位。

ティア 間違なく貧乏ものです。それなのにあの人のやる事と言ったら貧乏人とはどうして
も思えないことをやるんですからね。時々、ばかみたいに気が大きくなって。

マリアナ 『與えた。そしてまた與えるだらう』この金言を大切にしておいでよ。これが人
生觀のすべて。

ティア あなた塩壺の話、知ってるでしょ。

マリアナ 塩壺の話？

ティア みすばらしい男に盗まれた塩壺の話。

マリアナ 知らないわ。そんなお話。

ティア あら、じゃ、あたしがお話してあげます。

マリアナ その話が善行ならばお父さまは話して下さらないわ。私が知ってもどうにもなら
ないの。

ティア とても話してあげたいですよ。このお話。一月ほど前、お父さまとは知り合ひで
ないみすばらしい男が、働き口を探しに見えたんです。その人が帰ってからお父さまはテ
ーブルの上にあった銀の塩壺の中の一つがみえなくなっているのにお気づきになった。
四、五してその男がまた来た……けどお父さまは、その男が先の時、すりへったつぎはぎ
だらけのズボンだったのが今度は新しいズボンをはいているのにお気づきになったんで
す。それでお父さまはしまっておいでになった二つの塩壺をお持ちになり、つい、男に
こう言ひながらお渡しになった。

『わしは働き口を見つけてあげることが出来なかった。が若しよかったらこれを持って
お帰りになるがいゝ。そして私のために祈って下され。』

その男は泣いて謝り、犯した罪を白状しました。

マリアナ お父さまがそういうことをなさったのを数えたてたら一晩では足りないわ。

ティア そんなお人善しがあなたの事となると考える事もしないのだから。男はみんなそ
う。あなたは無慈悲に扱われてます……ところで騎士の方はいらっしゃるのかどうかし
らねエ。

マリアナ ベルナル様が最初だといゝけど。

ティア ベルナル様は御子息のハシント様をなぜ一緒に連れておいでじゃないのでしょうか。
もっともそうなるにあなたはこの窓へくつついたきりでしょうが。

マリアナ 間違ひよ。私にそんな事、できないわ。

ティア 臆病な戀人ね。

マリアナ あなたにそう言われると私に恋人がいるのかどうかも判らなくなる。

ティア 戀をしておいでですよ。それに、ベルナル様とイザベル様がこの結婚話をお父さまのところへ持ちこんで二年ごしで着ている着物を見て『なんだ新しい着物じゃないか』なんて言う人のいない人のところであなたが暮すことを神様は望みよ。

マリアナ あら、ちようどベルナル様だわ。ねえ。私だけにしていただけなくて？ 私ベルナル様とお話したいの。

第二場

マリアナ、ドン・ベルナル

マリアナ ベルナル様、お目にかかれてうれしゅうございます。

ベルナル わしもだよ。マリアナ。 吾々の今日の會合はあんたにとつても一寸したことになる。 吾々騎士團の中の三人が新大陸へ出帆するんな。

マリアナ ベルナル様は、お発^たちにならないのでしょうか？ ハシント様も？

ベルナル わしの身体が許るせばちやが。ハシントはヴァドリッドで役目があるし…それで吾々^はあんたの父親を發^たせようと説き伏せるつもりじゃ。

マリアナ お父さまを出發させる?!

ベルナル あんた…わし…ハシント…あんたの倅^たせのために、あれは發^たたにやらん。もちろん長い間…というわけでもなし…十八ヶ月。一年位。おそらく。その間、あんたはコゾロスの修道院でクリステイナ伯母さんと暮^いすが良いだらう。昔、騎士團の妻がしたようにな。

新大陸じゃきつと一身代、こしらえられる私も奴に教えよう。そしてちや。わしが何故そうするのもあとで教えてあげようて。淋しくなるだらうからな。

マリアナ 判っていますわ。

ベルナル 本當かな？ あんたの父親に較べたらあんたはすぐくもの解^いりがいい。

マリアナ でも、新大陸で一身代つくるためだなんて父におっしゃってはいけませんわ。儲ける話は大嫌いです。

ベルナル 言わんよ。よく知ってるからな。別の理由をつけよう。失敗はせんだろ。他の騎

士にも来たらすぐ言うが：金という言葉は誰の口からも出ません。
他の連中は、わしだけの私事のあることも知らん。だが失敗したら腹の底まで割らにや
ならないだらうて。

マリアナ　お願いですわ。小父さま。お氣をつけになって。

でも、その時はいつかの夜みたいいきつとしょげこんでしまうわ。

あの晩はとても沈んで、いまゝでみたこともない苦しそうな顔。十字架の上のキリスト
様のように肩の上に頭をもたせて、ぶつゝく呟いていた。苦しんでいましたわ。あたし頭
を傾けてきいたの、そしたら父の言っているのがきこえた…。

ベルナル　どんなことをぢゃ？

マリアナ　こう。『おゝイスパニヤ。イスパニヤ。』

第三場

マリアナ、ベルナル、アルバロ

ベルナル　なんて雪ぢゃ。門まで道をつけるのも容易じゃないて。

アルバロ　わしがこの雪でなにを想ひ出したか判るか。ドイツの叙事詩の中の文句のなん
とか言う場面だ。一人の騎士：チュートンだったかな：城砦とりでの高く上げられたはね橋の
前に立っていた騎士だ。降って来る雪の中にな。彼は頭を下げ伏してはね橋の下りて来る
のを待つてる。そいつは捕虜になって擱とどまっている娘の身代金を持って来たんだ。

時は経たつ。が城砦とりでの連中は時のたつにつれて彼の願をこばみはじめた。連中は男を嘲りは
じめた。彼は傲慢で残忍なおそろしい敵の前でずっと待った。奴等は雪の球や、腐った骨
を男に投げつけた。彼はこらえた。ちいさな娘のためにな……。

ベルナル　君はどうだ？　マリアナにもあんたはそうしているかね。

アルバロ　たしかだとも。

ベルナル　本當にか？

アルバロ　たしかだ。

ベルナル　怪しいが、そうまで言うならまあ安心も出来るさな。

表戸に戸叩金(訪意を報しらせるもの)の音。

マリアナ みなさま：お友達がいらっしやったわ。

アルバロ わし等の友達だって？

マリアナ 騎士團の方々よ。

アルバロ 騎士團の連中は味方というだけだ。友だちじゃない。

ベルナルの腕の上に手を置いて

この人を除いてはな。

マリアナ退場。オルメダが登場。

第四場

アルバロ、ベルナル、オルメダ、次にヴァルガス侯爵、オブレゴンが一緒。

次にルタマンディ

アルバロ わしはベルナルに、この雪である砦の前のチュトンの騎士のことを想い出していたといったところだよ。

オルメダ わしは二十七年前の雪を想ひ出す。グラナダに攻め入った時のシエラネバタの山々の萬年雪をぢや。一月の空は六月の青さぢやった。わし等は空につるした敵方の経帷子だなどと言ったもんぢやった。それからイスパニヤが無事だったと涙を流してみたりな…

アルバロ グラナダの夜。戦^{いくさ}支度^{さじたく}のまゝでわしは天主様のことを考えていた。戦の後は兵士たちは劔をぶら下げた立ち木にしか見えなかった…

ベルナル そう言えばグラナダでの三人の古強者が揃ったというわけぢや。祖國の独立のため、大童に暴れまわったな。

オルメダ わしに判らんことぢやが、何故アルバロ、君はこの二十年間、榮光に覆れながらも、軍職で我慢していたのかね。

アルバロ わしはそれから二年間、モロッコで戦った。だがモロッコは。

オルメダ そうだった。テレムセンの捕虜の老人に言ったな。君は不思議な事を言った。『勝利は確實だ。が得る価値もない』

アルバロ 想ひ出せないが、そうだったかも知らん。

戸叩金の音がする。ヴァルガス侯爵とオブレゴンが入って来る。ヴァルガスはびっこをひいている。会釈する。

オルメダ ルタマンデイがまだ来ん。若いもんは集りに必ず遅れて来る。

アルバロ そうだとも、若いものはいつも少しおくれる。

戸即金、ルタマンデイが入って来て會釋をする。

騎士達はテーブルのまわりの各々の椅子の前に立って十字を切る。

『ベニ・クレアトウル』と唱え終ると椅子に掛ける。……間。

ベルナル わしはドン・アルバロここに集まられた諸君に願ひがある。

いつだったか名前は秘すが或る男がわしのところへやって来た。わしはその時こうきいたんぢゃ。『どうして修道院に行かれぬのだ』。その男はこう答えた。『修道院の人達はわたしを構ってくれないでしょう』

わしはそれを聞いて夜も眠られぬほどぢゃった。と言うのはぢゃ…そんな腰抜けは平和を護る事すら出来んぢやろう。な？ どうぢゃ。諸君もわしと同じことを考えと思うがわし等のせにやらんことはあくまでせにやらん。

オブレゴン 私は二週間ばかりヴァドリッドに行く豫定ですが、大司教に會つて我等、騎士團のためになにか手を打ってくれる様に頼みこむつもりです。

アルバロ お前ならうまくいくだらう。

オブレゴン 別の厄介なこともあるんです。オランから逃げ出した例の騎士のアンコレナのドン・ジュアンのことなんですが、オラン王の命令で囚人ということになっているんで…これについてどう考えます？

アルバロ 王が命令した？

オブレゴン 本當です。

アルバロ 王の命で囚人になった連中は不名誉だが、逃げ出した奴等もだ。 わしは王にその命令を撤回する様たのみこむつもりだ。

ルタマンデイ 若し王が拒絶なされたら？

アルバロ 王じゃありません。我々騎士だよ。道德の尺度を決めるのは。 たった十九才のイスパニヤ人でない王になにが判る？ 十九才の國王！ 若すぎる！

オブレゴン。王への請願に我々は署名するんだ。いゝな。君にもそれは見せるがね。

オルメダ 諸君。わしはここに集まった諸君——私と同意見である諸君の名をもって話した

いことがある。吾々の中の三人が、未月、出帆準備の完了するファンレアルの艦隊と新大陸に出発することになる。オブレゴンは今迄通り艦隊での隊長だ。ルタマンディは、イタリアで苦戦している若い王のところへ幕僚として発つ。最後にわしは、戦う勇氣はもうなくなったかも知れんが、キューバに残る。王の任命でカマゲイ総督だ。

ベルナル 丈夫ならわしだって発ちたい。

ヴァルガス わしもだ。このいまわしい傷め！

オブレゴン 或る時。イスパニヤ軍がモールに大勝して侵入したときだった。大部分は降服したが一部の敗残兵が山の中に逃げこみ抵抗したことがありました。なにせ山の中で八世紀のような古い戦法で一步一步、戦うしかなかったのです。大変な戦ひで味方同志が裏切りはするで……。同じ年の一四九二年、ある帝國を征服するために出発したコロンブス達がサンサルバドルを発見した。彼等はイスパニヤ人だった。

吾々祖國の恢復もイスパニヤ人だ。しかも同じ年に。天様がお望みの事だったのだ。この偉大な連続はこの世で一番崇高なものではないでしょうか。

オルメダ さて諸君、本題に入らう。吾々の尊敬し愛する『サンチャゴ騎士團長』のアルバロ。君は新大陸へ我々を連れていこうと思つとるぢやろう。

『イスパニヤに十字軍の絶えたるはなし』。こういう諺もある。新しい十字軍が又生れるってわけだ。

ベルナル はつきり言えば、あんたみたいな人に改めて疑問はないだらう。

黄金。眞珠。土地。奴隷。役に立たぬものは何一つない。一刻も早く始めた方が良い。施しもので生きたくなければな。フェンレアルの遠征では、あんたは劔を片手に敵を追ひはらった。その再現を誰も彼も待っている。どうだ。え。

今日に限って戦う勇氣をなくしたかね。戦わずして勝つというのもあんたの念願の一つの筈だ。キューバ。ジャマイカで休養するつもりでどうだね。

アルバロ つまらぬ。無益なことだ。

ベルナル なんだって？

アルバロ 言いすぎかも知れん。がいまの話は全部馬鹿気なことだとは思えん。

ルタマンディ アヴィラから出発するのです。

アルバロ 星は望めばこそ美しい。

ヴァルガス 昔、あなたの持っていた榮光はどうしたのです。

アルバロ 昔の榮光。私と一緒に戦って死んだ人達のものだ。わし攝は墓にむかってよく言う。『天主は与え給ひ、また奪ひ給う。天主の御攝理のまゝになれかし』 わしはなにもかも忘れて捨て、暮したい。

ヴァルガス あなたはいつも話を滅茶々々にしてしまう。

アルバロ そうかも知れん。何の望みもない男は集りの中では邪魔になる。

オブレゴン 望みのない……お年のせいかも知れませんが、それでもなにかおやりになりた
いことがありません。

アルバロ なにかも終ってしまうのを待っているだけぢや。

ヴァルガス 惨めな暮しをなさって、惨めな自分とですか。正義を望む人は意気を失わない
もの。人を賞めはやすのは他人でなく己の心。

アルバロ 人が判ってくれようとくれまいと、どうでもいい。

オルメダ 十字軍の聖戦に加われば名誉、榮光などむこうからやって来るぢやろう。

アルバロ 聖なる戦。なるほど最初はそうだった。がいまは都合の良い理由でわしをうんざ
りさせるだけ。

若しわしが大大陸に行けば、わし等自身よりも土着のインディアン達のために働くこと
になる。というのは『あんた方を裏切る』ことになる。傷ついたインディアンを介抱して
やったので裏切者とのゝしられ吊り首になったイスパニヤの兵士がいたらう。あゝなっ
てしまうと悪い。

オルメダ 澤山の騎士が苦勞して戦かつとるが誰も君みたいなのは考えとりやせんだら
う。

ルタマンデイ 吾々の守護の聖人がイスパニヤ軍にお現われになったと言ひます。白毛の馬
にのつて。

アルバロ そして『サンチャゴ騎士團よ』とお呼びになったんだらう。一体なにをしている
んだ!! と。だがわしはイスパニヤ軍が何も知らずにこつちを信頼していたザラガの
インディアンの女王を毘にかけたことも知ってる。女王はこれっぽっちも敵意を抱いて
いなかった。天主の名をかたつてアルカンタラの騎士たちは無惨なことをした。

女王は吊るされ、酋長達は生きながら火焙りになる。これが大義名分に名を借りて騎士
が大大陸でやっていることだ。吐き氣のするようなことをな。

オブレゴン 偉大な思想に慈悲はありません。

ヴァルガス 多少の暴力は仕方ありません。少数が多勢を屈服させるには。

アルバロ 屈服させる？ どんな必要で？

オブレゴン イスパニヤの榮光のために。

アルバロ 侵略者……イスパニヤ。信仰、魂、精神、風習……みんな台なしにしてしまった。

土地を占領するのがそんな大切なことか。人の心は変えられまいに。

子供だましのばからしいことだ。無駄だ。そんなことをしていると何を尊び護るべきか判らなくなる。手に入れれば入れたで奪われはせぬかと心配になる。新大陸がそうなるならうとは目に見えているのだ。植民地と言って馬鹿にするのもいかぬ。奴等とても死の十字架を背負って生れて来たのだ。

オルメダ だがな。わし等が天主の道を教えんと奴輩の大部は地獄行きぢやて。

アルバロ 大勢のイスパニヤ人が新大陸へ出かけたため火焙になる。

オルメダ なんてことを言うんぢや。

アルバロ 新大陸がどうだと言う奴輩は不純だ。愛情を持たせはするが、吾々の同胞が新大陸でやった事と言えば下らんことばかりだ。少し後になって或る男を表彰しようと言う段になった時みんなこう言う。「彼は新大陸遠征には何の關係もなかった清浄潔白の士であります』

オルメダ アルバロ!!

ルタマンデイ 吾等を侮辱なさいますか？

アルバロ 新大陸はイスパニヤ人の心の中に金儲けや不信心、弱いものいじめの搾取を植えた。新大陸はイスパニヤの黄昏。たそがれ

オブレゴン 帰らう。長居は無用です。

ヴァルガス あなたはイスパニヤがだんぐ傾いていくのを腕組みしただけで見守らうとなさるだけか!?

アルバロ どうしてイスパニヤはこうなったのか。わし等ではどうにもならぬ。イスパニヤはわしの恥だ。名誉や慈悲がくされ偉大なものが値打ちをなくす。嘲弄される。そういう世の中ぢや。なにも出来ぬ。動物共の勝利だ。乱れ切っている。かたりの女王に盗人と罪のある小姓と無能と不名誉な腰元が控えている……そういう有様だ。だます奴がだまされた連中から尊敬されてる。わしが勝手にしゃべっているんじゃない。フレジナン王が御臨終にはこう言われた。『わが同胞よ。はらから 日毎に頹腐マヤの淵を歩むわが同胞よ』。

ヴァルガス　これが世の中の歩みというもの。

オブレゴン　あなたのお好きな騎士道花咲ける頃もいまと結構同じだったんでしよう。

アルバロ　いつの時代でも改善され進歩しなければならないのだが……。

ヴァルガス　あなたみたいな御立派な信者は全く教會の模範。だがそんな教會は三年も前に滅ろびてしまひ、モイゼは三千年間、奴隷になっていた。というわけで信者は本當の悲劇には逢えないのでしようて。若しあなたが正しいならこの世には極樂淨土エリユスしかないことになります。

アルバロ　だからわしはちつと耐えているのだ。

ベルナル　あんたは自分の時代を見捨て五十才にもならないのに八十才の老人みたいな話をする、大袈裟にな。考えてばかりいずなにかすることだ、そしたら……

アルバロ　なんかやらうとした。その度に殻から頭を出す始末になる。性分でな。頭の上をこつぴどく叩かれる。イスパニヤはわしを護らうともしてくれなくなった。

ベルナル　世の中に幻を見ているよあんた。そのまゝをみることぢや。

オブレゴン　新しい時代の敷居口で人るのを厭々して。

アルバロ　（むしろ諦めて）全くだよ。

ヴァルガス　孤独なんて言う英雄気どりの看板は下ろして、出来ようと出来まいと自分を直接ぶつつけてみて戦うのがむしろ英雄です。

ベルナル　善い人間は勿体ぶらず人とできるだけ足なみ合せようとするものぢや。と言って道徳から逃げ出すのでもない。生き難い時に生きるこそ徳高い男というもの。

アルバロ　疲れた。あまり憤慨しすぎた。意地悪でげすな低能とつき合ひたくない。前は侵略者がわし等に泥を塗ったが今度はわし等が誰に泥を塗る？　グラナダの戦ひでわしは死ぬべきだった。あの頃はイスパニヤはちつとはましだった。どうしてわしは生き残ったのだろ。どうわしは生き長らえる?!

ベルナル　なにか……あつたな。いまゝでそんな弱氣を言ったことがなかった。

アルバロ　キプロスの島の土人は『し』と彫られた頸環をしている。『しずかに!!』の略だ。全くだ。イスパニヤでも正しい者は誰一人しゃべらない。もし沈黙の騎士團なんてのがあったらわしは騎士團長になりたい。

（間）

なんでこんなことをしゃべったんだらう。

オルメダ 修道院へ行け。好きな様に一人でいられるだらうて。

アルバロ なにがわしをこうまでするのか判らん。熱。判断力。なにが足りないんだ？

オブレゴン 世の中から隠遁なさるならくどくおっしゃらん方が男らしい。でないと下品そのものです。

アルバロ 清貧。諸君はそれを知ってなさるかネ。

十字架の下に吊り下げてあつた騎士の外套を持ち上げて

わし等の外套。外の雪みたいに眞白で清らかで赤い劔は心臓でしかも心臓の血の色ぢや。ということは清らかさという奴はいつも傷つけ殺されるから。我が主イエズスが十字架上で受けなされた様に劔の一突きでぢや。

アルバロ、外套のすそに接吻する。

少しためらうが外套の一番近くにいたオルメダがアルバロと同じく裾に接吻する。

だが最後には勝つ。幾度破れても。尊い使命を護る者が勝つ。騎士團はイスパニヤの名誉であり榮光の玉手匣ぢや。それを信じられん諸君はやめてしまえ。我々の務めもそこぢや。でないと我々は価値もない。わしも辛い。天主は我々に苦しみを與え給うた。苦痛と悲嘆がわしの生活、日々の糧。

だが諸君。無頓着で寛大な諸君。あんた達は樂をしようと苦しみと共謀になっている。人の道も騎士の道も地に堕ちた。

オブレゴン (ヴァルガスに聲を低めて)

愚にもつかぬことを。

アルバロ グラナダを占領する前、フロンテラに若い騎士が修練をしていた砦があつた。あの高い山の頂で小鳥の啼くのをきいたのが最後だった。以来小鳥の啼くのを聞いたこともない。

ルタマンディ どんな小鳥です？

アルバロ 威勢よく啼く鳩でな。人の愛を失つたりそういうことを言つたりしてはならぬと、いうのを教えられる様な気がしたのだ。

ヴァルガス グラナダ占領からでなく百年も昔のことだ。イタリアからのものなのです。

オブレゴン 一五一九年の騎士は一〇〇〇年の騎士と同一じゃないです。仙人ならいざ知らず。

アルバロ ずるいものがあるからだ。吾々はそれを押しこめていた。正直者には幸い御時勢だ。

ベルナル (諦めて) 諸君。引き取らう。

アルバロ 正直には不倖せな辛い御時勢だ。

ベルナル 諸君。また集まらう。今日はこれまで。

アルバロ (突然、落膽して) 正直者には不倖せ。善人には辛い。

ヴァルガスとオブレゴン急いで去る。

ベルナル (アルバロに) 膝をまじえ、腹を割って話したいことがある。明日、又逢ってくれまいか？

アルバロ 四時なら。

ベルナル では明日。

アルバロ 明日、また。天主がお望みなら。

ベルナル 去る。

第五場

アルバロ、ルタマンディ、オルメダ

ルタマンディ お尋ねしたいことがあります。

アルバロ なに？

ルタマンディ 私が行ってよいものか、わるいものかあなたに。

アルバロ もとより行きなさい。

ルタマンディ でもあなたは先刻、あんな風におっしゃった。

アルバロ お発ち。行きたいなら。もう十九才だし、やりたいことは出来る歳じゃないか。

ルタマンディ 私のことはどうでもいいのですね。あなたは私を軽蔑なさる。だが

アルバロ ちがう。自分の力がそれを決めるのだ。

ルタマンディ そうですとも。こんな下らない墓だらけの街に誰がいるものですか。

あなたがおかしいことを言うものだから決心が鈍ってしまひ、心から喜んでいたのが台なしです。あなたは今でも自分が正しいと思っていられるのですか？

アルバロ 正しい。

ルタマンデイ 私を絶望させるおつもりだ！
アルバロ そうかな。

ルタマンデイ、荒々しく去る。
若い頃はなんでもそう思ひたがる。

第六場

アルバロ、オルメダー

オルメダ わしにも同じかね。発^たてと言うかね？

アルバロ そう。ぐずぐずなさらずに。

オルメダ 年長の君が一番若いものの決心を鈍らせようとするんぢやから全く大した『サン
チャゴ騎士團長』だよ。

アルバロ 誰の長でもない。神の僕^{しもべ}の僕^{しもべ}です。

オルメダ 何故、若いものは発^たたせる？

アルバロ 若い者には別に大したことじゃありません。若い者は何も怖れぬ。何を尊ぶかも
知らぬ。賢^{かしこ}さというものがないのです。若者には海の遠征はずいぶん楽になるでしょう。
だが別の冒険は吾々の様に年老いたものゝため。心の中の戦ひがそれです。オルメダ。あ
なたはお残りになささい。

オルメダ、熱い眼でアルバロを見る。

二人は黙って抱擁し合う。オルメダ去る。

第七場

アルバロ、ひとり

アルバロ あゝ。わしの魂よ。まだいたか。お前とわしが最後に残ってしまった。

第二幕

一幕と同じ装置。だが鉄柵窓のむこうでは雪はもう降っていない。そして、

このアヴィラ特有の透明な灰色の空気を通してこの邑まちをとりまいている城壁のどっしりした塔が一つ見える。

第一場

アルバロ、ペルナル

この場を通して牝鴉が時折、部屋の中に入って来て餌をあさる。二人の足許に餌になりそうなのがあるか知れない。

ペルナル その時ぢや。私が相談したのはその父親にぢゃったが。

アルバロ わしは世の中で一番マリアナを愛してる。

ペルナル あんたの馬よりかね？

アルバロ (まじめに) わしの馬よりも愛している。

ペルナル マリアナはあんたに自分の氣持を話すことがあるかね？

アルバロ そりゃある。天主を敬つとるし私にや別の話をする時もある。

ペルナル 恥しいからだらう。わしはあんたみたいに宗教的な事について考えてあげたことはない。が心については考えて来た。ハシントはイタリヤとヴァドリッドから帰って来てからまだ三度しかマリアナに逢っちゃいないが、倅はマリアナに優しい尊敬を……持っている。わしもイザベルもそいつをよく知つとるが……マリデナが……あの娘も……また……つまり……そのう……。

(間)

マリアナはあんたに何も言わなかったかね。

アルバロ わしがそんな下らないことを氣にかけないことを娘は知ってる。

ペルナル わしは二人の心を話し合わうとやって来たんぢやて。わしらイザベルもこのまま

放つとけないと思つてな。 (間)

え？ あんたはむつつりした男だ。

アルバロ 別に話し合うこともない。放つとけ。放つといた方がいゝ。

ペルナル 乗氣じゃないのか？

アルバロ 突然すぎる。

ペルナル じゃ。娘御の氣持はいまゝで判らなかつたんだな？

アルバロ 判りたくもなかった。

ベルナル 可愛いとは思わないか。

アルバロ むか／＼するほど蟲の悪い話だ。

ベルナル マリアナの將來を夢みたりしたことなかったかね？

アルバロ 嫁にやれば失わねばならぬ。それにおつき合ひだとかで時間が無駄だ。そういうのは好きじゃないんでな。天主は娘を手離すことにうんとは言われまい。若しお望みなら神様が直接いらっしゃるだらう。ところがあんたが現われた。

手間どるのは一番いかん。あんたが手間とらずにやってくれるなら別に厭とは言わん。

ベルナル 吾々の子供の倅せのためだよ。氣にかけたこともないらしいがああ二人のためなんだよ。

アルバロ 倅せになれるだらう。がわしの家は陰氣になる。

ひよつとすると誰もいなくなつた方がわしも倅せになれるかも知らん。

ベルナル そうだとも。

アルバロ だがあんたにはわしが一体どんな静けさと孤獨を望んでいるか判らんだらう。裸で神とぶつかる！ 世の中はそのために邪魔ものだ。目をつぶつてただ音楽に聞き惚れるように……なんと書いていゝか……そういう氣になるんだ……必要なのは虚ろな日々。なにもない日々……友情も愛情もしのびこむ隙のない……

ベルナル マリアナは？

アルバロ 歩いたり唱ったりわしの世話もしてくれる。甲斐々々しい。だがわずらわしい。娘のことにいつもかゝりつきりだ。わしの心配は、あいつが惱まし氣にみつめられたり、笑われたり噂されたりせんようにということだけがそれならぬ。

ベルナル 一人ぼっちにしときたいのか？

アルバロ 或る時は一人ぼっち。或る時はそうでない。スパルタ人が息子に奴隸を見せたようにわしは生れ故郷をみせてやる。どう振舞つたらいいか娘もそれで知るようになるだらう。

ベルナル マリアナはいろんなことを知っている。

アルバロ 聖人伝なんかよく読む。いまにイスパニヤがどうして滅びるか判るようになる。ベルナル あんたにやあまり点のよくない娘だが、それはあんたの点がからいし変つてるか

らぢや。

アルバロ あ娘はわしを台なしにする！

ベルナル 台なしにすると？！

アルバロ 子供はみんなそんなものかね。わし等は飯の時しか會わない。その飯時すらわしのいない事がある。若い娘は手に負えぬ。苦勞の種ばかりで楽しみにもならぬ。

ベルナル 苦勞の種？ あんたは一人で苛立つて苦しむ。

アルバロ 苦しむ？ 疲れてるだけ。可愛いくて苦勞して育てたもののためだんく弱っていくのさ。

ベルナル 可愛いがっただと？

アルバロ 娘が何を考えようと関り合わぬことにした。知りたいとも想わぬ。結婚申込みならんぞ眞平だ。

ベルナル マリアナはそれで淋しいのぢや。そういうことを話し合うこともなく……

アルバロ 話し合うというほどの年でもなし、信じて呉れないのに祈ることも出来ぬ。

ベルナル もう少しの愛情が必要だよ。

アルバロ 愛情で……わしもそう思った。があれをそこの娘みたいに育てるつもりなら何も言わぬ。近よりもしないし誰とも衝突しない。ところが昨日みたいな事がおこるとだな。わしは連中みたいな下劣な精神で國を愛せない。わしがイスパニヤを好きなのは善いところがあるからだし、他の國がもしそうならやはり同じだ。それと同じでマリアナもあれ次第。

話はすんだらう？ 誤解も解けたし、もとおりの昔友達だ。

ベルナル なんていう親だ。娘さんはいつまでも若いわけぢやなし……マリアナは明日にでも、歌を唄えば花の咲く家へ移す。どうだ。天主がお望みなら。

なにもかも話せば、昔こんなことが或る書物に書いてあった。或る貴族が『我等、眞實を語るもの……』とな。そうだと、我等眞實を語るものはだ、よろしく虚言をしりぞけてだね……

アルバロ わしは今年になって四度しか嘘を言っていないよ。

ベルナル 正直に言っちゃうと、君は怒るが、やっぱり昨日君がわし等の言ったことで怒るのは無理ないね。

アルバロ わしも腹にすえかねていところだった。わしならどんな憎い敵が目の前にいても、すぐなだめて話をつけてみせるがね。

ベルナル 慈悲？それとも軽蔑でかね？

アルバロ なんだらうと君の勝手だ。

ベルナル もう一度君をおこらすかも知れんのだがきいてくれ。君はわしの家の実情は知らんだらうが残された僅かの遺産はカスカスだ。わしが消^{しょう}氣^げてるのは金がないからじゃない。金を得る才覚がないからだよ。フレジナンド王はわしを目にかけてくれなかったし、シャルル王まで家のやりくりは火の車だ。やつと息子のハシントの代で、あれが新大陸などへ行つてまあ將來へかすかな望みを持たしてくれたのぢやて。ハシントは幸運もあるがお役目結構で出世街道を調子よく歩いてるわけだが金もかゝる。ばかにならない位金がかゝる。もつと出世したいならもつと金^いが要^いる。將來のあるハシントをわしはどんな風に助けてやつたらいいのぢやろう。え？

新大陸だ。健康が許るせばわしは新大陸へ行きたい。がなにせこの年^{トシ}で。

ハシントの將來はいまにかゝつてゐる。ヴァラドリッドで役目で忙しい。奴の運^よの好^あし悪^あしわかれ目はヴァラドリッドだ。

結論としてだ。ハシントはどつか金のある娘と結婚しなきゃいかん。

で君に相談に未^またのき。人と人、友と友、親と親としてよく考えてみよう。

二年……一年でも良い新大陸へ行き、大金持になつて歸つて来れば、こりや一番いゝことだ。金は君のふ^いと^いころに流^いれ^いこんで来るよ。知つてなさるだらうがヘレラヤルサンはたった十八ヶ月で一財産こしらえた。黄金の山をさ。

アルバロ 話中失禮だが、良いことだと思つてなさるのか？

ベルナル 黄金の山と言つたのはいかんことだったかな。下らん。ヘレラは徳の高い御仁だったし、人はみな……

アルバロ 評判が落ちてしまふ。話はおしまいだ。わしは新大陸へは行きませんぞ。

ベルナル 娘御のためでもか？

アルバロ 天主の目にも、わしの目にもかけても行かぬ。わしはそれほどまで弱くはない。決してぢや。

ベルナル だが娘御はどうなさる？ 君は全くなんというひどい親だ。

アルバロ あんたが考^{かんが}へてゐるほどくはひどくはない。があんたの言つたことは正義を恥^はかしめたよ。わしをどう言おうとも勝手だが。

ベルナル あんたの冷酷さはオルメダ昨日言つてたがいかさまその通り。

アルバロ オルメダ。あの人は六十二才にもなってまだ政治だのかけひきだ。そんなことより安心して死ねるように準備したらよさそうなものに。下らぬお人だ。

ベルナル 娘御を自分のために犠牲にしている。自分のために。

アルバロ なんといい人だ。

ベルナル 可哀想な娘御よ。

アルバロ それは天主様でなきや判らぬ。御攝理^{みむね}のままわしは従うだけ。

ベルナル 天主の御攝理。君の逃げ道。

アルバロ いちばんたしかな頼りになるものだよ。

ベルナル だからと言って君の娘御はどうなる。

アルバロ 昔。ある騎士が無理々々娘を若い青年に賣りとばした。というのは父としての愛情で息子をしばつときたくなかったんだ。

ベルナル チュートンの騎士が娘をすくうためにすべてを捧げなかったかね。

アルバロ 傷を受けたが恥をうけなかった。

ベルナル 間違つた騎士道だ。夢を頭から信じこんでしまった男。社会にとつても危険だ。

アルバロ あんたは金のことばかり。いくら息子さんの為だと言えね。だがわしはわしの様にやる。あんたが息子さんを金の目方で売らうとなさうがね。

自分の娘をそうしたくはない。

ベルナル 金の話をする君は非難するがそれは間違つた氣取りぢや。商人を別にどうこう言えないじゃないか。誰でも自分の利益に敏^{さとし}いことは良いことだよ。

アルバロ 黄金の塊をイスパニヤの王にみせたのはどんなインディアンの酋長か知らんが連中を恐喝し暴力沙汰でその宝物を巻き上げたのは誰だった。國王自身も吾々四つの騎士團からカスリを取り上げる。

ひどい世の中だ。誰も驚きはせんがね。

ベルナル グラナダの戦い以来だよ。そういう風潮は。

アルバロ 誰も彼も黄金に目の色を変える。黄金は力だ。その力でなんか出来る。だからだ。なんかかんか出来るからね。

ベルナル 出鱈目に物事を割り切ってしまうね。

アルバロ 正義のために損を覚悟で犠牲をしなければならぬ。そう幼い時から教わって来た。富のために身を落してならない。そういう風に。だがあんたはそれが嫌ひだ。得する

ために手を擴げてはならない。そうも育てられたが上品ぶるだけのためかね。わしはしゃべったり聞いたりするのが苦痛だ。國王は新大陸に行つて黄金を求めるのは人情というものだから……と言われるがインディアン達にとっちゃどうだらうなあ。良い事じゃなさそうだ。

ベルナル　むこうもそうやす／＼と寄越さぬだらう。金銭を憎むものも輕蔑されるだらうて。

アルバロ　清貧は四〇年乗、神の興えられた大きな恵み。それどころかわしはもつと貧乏になりたい。誰もどうすることができまい。だがわしには永久の楽しみだ。たった一つの生甲斐。がどうだらう。富を崇ねばならない。魂をとられるのは真平。金持になろうとは思わない。そうだとしたら恥だ。

ベルナル　飢え死んでもあんたは本望だらうがマリアナはどうなるんぢゃ？

アルバロ　二人が好きなら一緒になるがいい。だが貧しく暮すのだ。貧乏でもキリスト様が彼等の足を洗つて下さるにちがいない。

ベルナル　貧しく暮す？　簡単にいくかねエ。

アルバロ　あんたはわしがマリアナにそうくることを咎める？　金持にしてやらんことを。罪つくりだ！

ベルナル　財産は罪つくりじゃないさ。

アルバロ　生れ變つて百萬長者に生れても人の言うことは聞かない。時々考えるんだがわしの思うことは他の人が理解できないことぢやないだらうか……とね。

ベルナル　他の人のために自分の出来る事もやらぬ男だ。

アルバロ　信者として完全になりたいのさ。

ベルナル　わしは最近三年間金を持っていたから土地を買つたりいろんな事が出来た。金を多く持つことがどんなに良いことか君は知らんね。平和で心強いものだ。信頼のおけるものだ。よりかゝれるし移り易いものと違つて頼りになるし横柄でもない。

苦しみや労働のあとうまく行つた仕事、それなんぢや。たとえば君の言う神への愛ぢや。それに忠実であるためには、生きなければならないだらう。まずね。そしたら君。君の徳は更に高いところまでいくだらう。

アルバロ　父が死んで公証人がわしに遺産がのこされていると言つた時わしは悲しかった。『わしが一寸の間で得たものを十年もかゝつてまだ手に入れることの出来ない人が沢山

いるにちがいない』。そう思えてならなかった。

この二年間、幾度もかなりの額の遺産が転げこんで来た。同じ考えが浮んだ。金の袋を前にして私は天主に祈った。『天主よ。この金を如何したらよろしいでしょうか』

わしは全部騎士團に寄付した。――

ベルナル それをマリアナへの持参金にするとは気付かなかったのかね。いやそれが至極、當り前の考え方というものぢや。あんたは飛び切りのことをした。神への愛という奴でな。可愛い子供にそれをやらないで憎んでいる世間にやってしまった。

アルバロ 天主の愛で救われる。

ベルナル 天主への愛かね。いつもそう言わせるつもりかね。

アルバロ そうする方が自然だった……といつもわしに言わせる積りかね。神への愛はごまかせない。いくら子供の為だと言っても天主は容赦なさらぬだらうて。それにわしが五十年前に死んだものとすれば當然騎士團のものとなったしそれが規則。天主の選り給うた家族もあれば血で呪われた家族もある。我等騎士團は一つの家族……

ベルナル もう騎士團はなくなったも同然ぢや。知ってなさるだらう。

アルバロ 騎士道精神が心の中に生きている限り騎士團はある。子供達にも大きな苦しみが必要だ。裏切りは常に同じ屋根の下にある。

呼ぶ。

マリアナ！

ベルナル 優しく興奮しないで。何を話すつもりかね。

アルバロ 或る父親はどんな風に子供を扱うかあんたも見た方がよろしい。

ベルナル おや／＼。だがもうきゝたくないね。疲れたから。

アルバロ モロツコに戀をしたというので娘を殺した父親がいたが……

ベルナル 気狂沙汰だ！

第二場

アルバロ、ベルナル、マリアナ

アルバロ マリアナ。お前はハシントをどう思つとるんだ。どう思つとるかをこの家でお前は言ったそうじゃないか。この家の中で！ わしがそういう話をどんなに嫌っているか

お前も知つとる筈だ。愛してるとかなんとかそりやお前牝猿と同じことだ。男と女の色戀沙汰は猿眞似と同じだ。こっけいな假面をかぶった馬鹿のことだよ。

ベルナル アルバロ！ 自然をあんたはみとめないのか。人々が聖なる縁^{えにし}として、
をそんな風に侮辱してはならぬ。

アルバロ 言ひ方が乱暴だったら許してくれ。だがお前はわしをとんでもない方法で傷つけてくれた。わしは少しでも靈的な生活をしたいと思ひ努力したんだよ。ところが台なしだ。思わぬ邪魔をされた……。

マリアナ お父さまのお望みになることしかあたし望んでいません。台なしにするなんてとても出来ません。

アルバロ 神の道と人の道に二股かけることは出来ないよ。(ベルナルに)娘を慰めて下さい。父親であるということがお好きな様だからな。わしのことぢゃが新大陸へは行きませんぞ。絶対に！

わしにや同じことだし神様にとつても同じことだ。だからむずかしいが……。

ベルナル いつかあんたはこう言った。『進む道に迷ったら一番苦難の多い道を行け』。

アルバロ 天主さま。わたしはこんなに苦しまねばならないのでしょうか。

ベルナル そうだとも。とにかく君が撰ぶんだ。

第三場

ベルナル、マリアナ

ベルナル お父さんがなんと言ったって心配することないよ。

いゝかい。よく聞きなさい。数日前からアヴィラに偉い人が滞在しているんだが…ソリア伯爵という……知っているだらうね？

マリアナ知らぬと頭を振る。

父親似でなにも知らないね。伯爵は若い宮廷じゃ偉いしわしもよく知つとる。わしの頼みで伯爵はお父さんのところへやって来る。國王の命令でお父さんを新大陸へ無理強ひしようという計画だ。わしはあんたのお父さんをよく知つとる、王に失禮なことを言うかも知れんが最後には王は王だから聴くほかあるまい。忠誠は彼を縛^{しば}る。そしたらあなたの愛もうまくいくよ。

どうだね。安心したかね。え？ どうだね。

マリアナ 激しい愛は無口です。

ベルナル 涙も同じだ。涙をぬぐいなさい。

マリアナ 涙が何処に？

ベルナル そこに。

マリアナ 別のことで泣いているのですわ。

ベルナル まだ子供だね。わしはあんたの父親だ。

マリアナ でもそうじゃありませんわ。

ベルナル それがうれしくないのだね。あんたのお父さんはどんなことをすると言うんだね。

マリアナ 天主さまのなさることを。..

ベルナル わしを父として愛してくれないのかね。

マリアナ さあ、私はどうしてあなたを愛せないのかしら、あなたの愛していらっしゃるのはハシント……

ちよつとまごつく。

ベルナル アルバロがなにか……。

マリアナ 父はなみ外れた正義の人。それだけが父のぜいたく。他の人には高くつくぜいたくですわ。

ベルナル 聖人かでなきや馬鹿だ。聖人は周囲から煩わしいとも思われる……。

マリアナ 父は私にはそうではありませんわ。

ベルナル あんたはあの男を我慢できるからだ。

マリアナ 尊敬しています。

ベルナル 騎士團の連中もわしと同じ考えだよ。同意見だ。

マリアナ 正義の人は世間を困らせますけど強制はしません。邪魔をされるのはいまわしいことですもの。

ベルナル 十八才にしては哲学者だね。

マリアナ 真面目なだけです。

ベルナル なにしろ彼は人の言ったことを一応は反対するからな。

マリアナ 父には不名誉なこと。

あたしは何も知らない。愛情。友情どんなもの。父は愛情を持っていないのかしら。右から左へ。なにもないわ。

父は頓着しない。高い尊い無頓着。そんなのあるかしら。

唯一の天主よ。『神よ。ただ唯一のことが大切でございます』。

この格言は曾祖父の時から私の家の格言だけど。

ベルナル それでね。もし娘御。あんたは左かね右かね。それは生活とは又別なのじゃないかね。

マリアナ 私みたいな娘には判らないことがあります。

ベルナル そうだらう。『心の中への眼』。神と自分を間違えてしまうからね。

マリアナ 父をガリぐの個人主義だとお考えですの？

ベルナル 自分を縛っている。だから幸福かも知れぬ。

マリアナ あなた様を知らないあたしでしたらいけない方だと思ひますわ。父をそんなに悪くおっしゃるのですもの。

ベルナル そうじゃない。むしろ善い男だと思ってもらいたい位ぢや。

マリアナ 幸福でいたいとは思ひませんわ。

ベルナル ハシントとの結婚はどうなる？

マリアナ 幸福になるため結婚しようとは思ひません。

ベルナル ぢやなんのため？

マリアナ あの方にとって私と暮すことが倅せだと思ひになります？

ベルナル そうじゃろうて。きっと。

マリアナ いろんなことで私あの方のお役に立てるとお思ひになります？ でも私はただ樂な暮しをしたいとは思ひませんわ。私、生きるために勇氣の要るような暮しをしたいのです。

ベルナル 人間にはいつも勇氣が必要だよ。

マリアナ 父に物事の重大さを鑑別することが出来るでしょうか。一番大切にむずかしいことでございますもの。

ベルナル そりゃあんたのやらにやらんことかも知れないよ。わしには関係のない事かも知らんがね。

マリアナ おみど御聖堂に入る時みんな扉をそつとしめる様に、結婚しても誰も私のうしろを見れ

ないようにしたいのです。

私はあの方のたった一人の女。あの方は私のたった一人の男という風に……。

ベルナル 若い人は好きなようにするさ。

マリアナ あたりはあの方の気を散らしてしまうでしょ。

ベルナル 金。怖くないのかね？

マリアナ 富は天主様のお興えになる試練ですわ。それをのりこえなければいつか。

ベルナル アルバロと同じだ。少し賢いかも知れぬが。言葉にもそれが出るよ。たとえば『あたりはあの方の気を散らしてしまうでしょ。』なんて言葉はついさっきアルバロがそう言ったばかりだ。一人でむずかしがったり……そっくりだよ。

マリアナ 父に似なければと思ったのかも知れませぬ。

ベルナル 考え違いだよ。『アスピック』みたいにな。『アスピックみたいに』か。これはハシントの言ひ方だよ。

マリアナ ハシント様は、仲々私を賞めてくださいませんわ。

ベルナル わしの前だとハシント様とは、全く他人行儀ですな。

マリアナ そのうちに私はあの方を苗字で呼ぶ事が出来なくなります。私にはただ一人の人。

ベルナル お互ひに意地を張って冷たくしあうのは止^よそうな。二週間前にハシントがこう書いてよこした。あんたも知った方が良い。こうなんだ。

『私の家では彼女の優しさが水の滴りのようになるでしょう』

三日前にはこうだ。

『彼女への私の愛は夜半に私を不意に目覚めさせるほど強いのです。私は星を散りばめた様な遠い彼女の声を聞きました。』

マリアナ 星を散りばめたような遠い声……私の聲が？

ベルナル そうぢゃ。あんたの声だよ。二週間前にはこう書いた。これも知ってもらわなければならぬ。

『彼女を想う時、息が出来ない位です。』

三日前はこうだ。

『彼女の髪の毛の一筋々は雪の上を彼女の家まで続いている道です』

マリアナ ほんとうにあの方が、そう？ でもちがひますわ。あたしを喜ばそうとなさっ

ていらっしやるのね。

ベルナル　とんでもない。一官だつてよろこばそうと思つて言つたのぢやありません。

マリアナ　あのう小父さま。あたしのところへいらっしやるその伯爵さまには、榮光を楯にして説き伏せるようにとおっしゃっていただけません。金の事を一言でも口に出せば父は門から追ひ出してしまふに違いありませんもの。イスパニヤの道義を世界に示すために新大陸へ行けとの國王の命令だということになさいまし。新大陸のインディアン達には真の騎士團……つまりサンチャゴ騎士團を識る必要があるからだ……ということになさいまし。ね。ベルナル様。そしたら父も乱暴なことはしませんわ。國王の命令だ……と暗に仄めかせなさいまし。私はその間中、十字架の前に膝まずいて父が納得してくれるように祈つております。

ベルナル　神に祈る？　だがあんたは父親のためにも祈る、肉親の愛情という奴は……。

マリアナ　父のために祈る？　いいえ。決して！

ベルナル　『決して!!』か。あんたの父親がよく使う言葉だ。その言葉を使うと折角の話が台なしになってしまう。使っちゃいけないよ。

マリアナ　えい。決して。

ベルナル　またアルバロの『決して』だ。いやはや芯が疲れてしまう。

マリアナ　お許し下さいませ。私達は強情なのです。

窓を通して陽がうすい光(灰色の眞珠の様な光。アヴィラは灰色の眞珠である)を舞台の上に投げかける。

あら。陽の光ですわ。二ヶ月ぶりではじめての光。

ベルナル　マリアナ。あんたの眼の中になみだが光っていなさる。泣いてなさるのぢやな？

マリアナ　火鉢の煙のせいですわ。

ベルナル　そうだとも、わしのちいぢやな眞珠。わしをだますことは出来ないよ。

マリアナ　冬になってからはじめての陽の光。太陽がまだあつたのかしら。雪はもうすぐとけますわね。まもなく春がやって来ますわ。

ベルナル　おや／＼。まだ一月になつたばかりぢやて。

マリアナ　春がちかづいて来る。明日、春になるのだわ!!

ベルナル　倅でない方がよい……そう言つてた筈だよ。

マリアナ　えい。倅でいたいとは思ひませぬ。ベルナルさま。

第三幕

同じ装置。外では雪がやまずにちらついている。

第一場

アルバロ、マリアナ

マリアナ（讀む）『脱獄に失敗し、また元の牢屋にいたのだと気づいたディエゴモンゾンは新しい傷ついた囚人として底知れぬ、光のない絶望に打ち沈んだ。突然、彼は気づいた。この苦しみは神が特別に自分を愛して下さっている証拠だと。で彼は手を縛っている鉄環を下げて静かに眠りに落ちた……』

アルバロ ふるい武勇伝はわしをひどく感激させるな。わしは不信心な連中と戦うことがな
ぜ『聖戦』と言われるか知つとる。それは戦ったイスパニヤ人が聖人だったからだ。

昔は、清らかな軍隊もあつたということを考えると涙が出る。いまの軍隊と言え、なにもかもやくざな變てこな軍隊だ。肩をすくめて馬鹿にしたいぐらいぢやて。

かれこれ三〇年にもなるのに新大陸には、こういう涙の出る素晴らしい武勇伝が一つもないじゃないか。

マリアナは火鉢のおき、をシャベルにとる。煙は出ない。それを石壇の上にとる。

いらなにかね。火は？

マリアナ 他では、おきを炭火がわりにしているのは下品だということになっていますわ。

アルバロ そのまゝにしとけ。ティアやイシドロが怖いのか？あ？ ソリア伯爵とかが来るからかね？ 恰好やて、いさいが悪いと思うのかね。わしだって他の連中がどんな暮らしをしとるか知つとる。要するに気持次第だよ。

マリアナ ソリア様は宮中でも一、二の立派なお方とのこと。

アルバロ 一、二ということがあるもんか。第一名前もきかん。だがなにに出来るんだらうて。三月前、国王に法王から教會や修道院、僧院に関する特別な権限を申請なさるように進言したがな。そうく破門された兵士も墓に葬ってもらえるようにだ。それを望んでいたからな。それかな。だがどうして王のところから使が来るんだらうな。わからん。その請願に回答が出たのだらうか。どうだマリアナ。わしはそんな気がするが。その武

勇伝をわしの部屋へおいて来てくれ。それからな。蠟燭を新しくしてくれ。昨夜は（ヴオルフラム・エッセンバッハの）パシィファルを……騎士の識歌中の讃歌だが……読んでいたんだが燭台が消えたので途中でやめなきゃならなんだ。それから石鹸を。もうないからな。それと出来たら寝台の敷布をな、裂けたところを繕つていってくれ。

マリアナ つくろつても又切れますわ。全部使ひ切つてあるんですの。

アルバロ 穴のあかないところをえらんでな、端の方はまだ使えるよ。

マリアナ 新しく買ったらいけません？

アルバロ 無駄なお金は使ひなさるな。繕うのが厭か？

怒鳴るのをこらえる。

お前の好きにしな。だがわしはなにも欲しくはないのだよ。敷布の話なんかでわしの頭をくしゃ／＼にせんでくれ。

退場しながらマリアナの前で止る。

そして彼女の頸すじを軽くたたく。

髪がジャケットのエリから出てるよ。だらしくしちゃいかんよ。

第二場

マリアナ

マリアナ お父さま。一番あなたを愛しています。あなたのためにあたしは清らかな子供の時代をそつと守りました。私は生れた時からなにかのために心を備えておいたのです。あなたの腕をひろげ私の苦しみを取り去ってください。

私の苦しみはあなたの苦しみと同じでただ一つのもの。それなのに、なんということを、なんということをしたのかしら。

私の髪をけずり部屋も見えたことないという人に私はこんなひどいことをしようとしたのだわ。

お父さま。私をおつくりになったお父さま。私はお父さまを愛しているわ。そのお父さまから逃げ出そうとするなんて!! あゝ!!

道路に面した扉にノックの音。舞台の外から聲。

伯爵さま。おゝ天主様。私の一生を賭けた言葉が知らぬ人の手ににぎられています。天主

様！ 伯爵さまはそれを言いに来ました。それを私も望んでいます。が父がすべてを見通しますように。すべてを明らかに……すべてをお變えくださいませ……。

第三場

アルバロ、ソリア伯爵

アルバロ あなたはまるで別世界から来られた様ですな。

ソリア 長靴は雪だらけでなんて雪の多い冬でしょうな。わたしはトラルまで行く用がありましたがこの雪では、田舎は頭の上まで雪でその他はなにもありません。雪の重みで木の枝も折れる、氷の張った川は狼まで死んでいます。墓穴から掘り出したごつい根っこみたいに。

アルバロ アヴィラは雪に覆われ瞑想しています。偉いもの、いちばん良い揺籠ですよ。大砲だって打ちこわせません。深い清らかな沈黙の中からなんかが生れる。

ソリア そうでしょうな。瞑想は活動をもたらす。あなたみたいに。あなたが騎士團付属の救貧所で毎日いそがしいということは私も知っています。劔の代りに花を持たれてですな……

アルバロ あなたはお若い。もう少したてば人なんてものは結局は人を愛する為に生れて来たのだと気づくでしょう。でないと自分自身すら忘れてしまひますよ。

ソリア 他の人はあなたを忘れません。

アルバロ 或る時期、忘れられていることはかえって光榮です。完全な誤解はすばらしいことですが誤解されている連中から誤解されることがもっとも正義だと言えます。やがてわずかの時がそれを消してしまふ。

ソリア 高いものを想うこともあなたの言うのと同じことですよ。生きる者をたすけます。

アルバロ 自分を殺せば他の人達は生れる。

ソリア でもあなたの静けさを乱すものがあるでしょう？

アルバロ (無愛想に)お願ひぢや……。

ソリア 野心や望みがあなたには一つもないのですか？

アルバロ 名誉がみんなから軽ろんぜられている時代になにを望もうと言うのです。え？

ソリア (冷笑して)名替が軽ろんぜられている？ そんなことがあらうはずがありません。

それに憂鬱すぎやしませんか。なにかある。あなたが思わなくとも別の人がそう望んでいる。それです。いまこそあなたの時です。私がなんのために来たのか御存知の筈です。フェルナンデルが遠洋航海の準備をしていますがねえ……

アルバロ え？ あんた。一寸まって下さい。そりゃ知っていたが私の待っていたのはそんなことじゃない。

こいつはがっかりだ。

だがその話には乗りませんよ。うるさくみんなすゝめるがどうせむだです。

ソリア わたしの話をきいて下さい。

國王は大規模な遠征をなさる御決心で冷静で正しい人を大勢新大陸へつかわされることになった。

アルバロ 汚らしい野心でな。御免だ。

ソリア あなたは私を拒絶なさることが出来ても國王を拒絶なさることは出来ない。

アルバロ 國王？

ソリア 國王は遠征軍の中にあなたの名をあげた。

アルバロ 誰か國王に入智意したな。

ソリア 誰も。わたしもそこにいた。

アルバロ ふーむ。この老ひぼれとサンチャゴ騎士團を憶えていて下さったのかね。

ソリア あるおへつらいものが言ったのかも知れません。あなたの名誉ある名を。

アルバロ 世間の称讃。世間か。

ソリア 國王の思召しです。

アルバロ いくら言ったところでむだだ。

ソリア 國王に忠実である為には自分を犠牲にしなければなりませんからな。

アルバロ 出かけるほどの元氣もなし。

ソリア むこうに行つて國王の名を高からしめればよろしいのです。

アルバロ その他國王はどんなことを言われた。

ソリア 憶えてますともはつきり。こうおっしゃった。『高貴な魂は困難な遠征のたった一つの決め手……そのために……』

アルバム そのため…なんです。そのために私は新大陸へ行くのですかな。

ソリア そりゃ知りません。

アルバロ こゝに深い言葉がある。が……この若者を驚かせる。新大陸は目的のないただの悲劇。そのためわしは……

ほんとのところは……それはわしを生きかえらせるかも知れない。……が……。

ソリア さあ、あなたの御返答は？

アルバロ 考えさせてください。

ソリア 國王の命令ですよ。よく考えてみたところであなただうなるものですか。わたしは明日ヴァラドリッドに帰ります。

アルバロ おゝ……明日お帰りになる……(考えこむ)。

第四場

アルバロ、ソリア、マリアナ

マリアナ (急いで駆けこんで来る)

お父さま。嘘です。みんなひどいばか騒ぎなの。ベルナル様が伯爵様に智慧をつけられたのよ。國王がお父さまの名を言ったなどと。王さまはなにもおっしゃりはしないのよ。

ソリア お嬢さん。ベルナルの話に同意なさった筈だ。第一あなたが……。

マリアナ 馬鹿だったの。私は霧の中を歩くみたいになにをしたらいいのか判らなかった……。私、畏にかかるところだったわ。

ソリア アルバロさん。私がこゝへ来たのは間違ひだったかも知れん。ベルナルの頼みで私は力を貸そうとしました。なるほど國王はなにも言わなかった……があなたがその気なら私が國王に申し上げてもいい。

アルバロ 私を愚弄なさった後で、相談なさらうと言うのか。

ソリア 人のために盡すってことは面倒なことですね。

アルバロ わしは何も望みません。お互ひに理解するには遅^おそすぎるし、伯爵。なにもかも終ってしまったのぢや。

ソリア 最後に一言。あなたが少し若かったらと思ひますよ。若者は短慮だ。が老人が聖人^{としより}ぶって傲慢なのにくらべるとずっと温い血が通ってるんですから。

アルバロ 頭を高くはしていてもその実は土を懂れているのぢやて。さあお発ちなさい。あなたとは住むところが違う。私の氣持を説明するのは容易じゃない。不可能ぢや。

第五場

アルバロ、マリアナ

アルバロ どうした？ え？

マリアナ 私、部屋にいました。十字架の前に跪いて、お父さまが御爵の言う通りになるようにと祈っていました。

突然、私は十字架のところにあなたを見ました。いつかの夜、ぶどうの葉のそばの椅子に腰を下ろしたまゝ眠ってたように：肩の上に頭をもたせて。私はお父さまがキリスト様みたいに人から嘲られているのだとすぐ感じました。あなたを救わなければ！ と思ひました。十字架の道行こそ私の一生。私の待っていたもの。そう思ひました。それまで私はあなたを術策にかけようとしている人たちと一緒になっていました。

アルバロ （娘の前に跪く。手を取り額にあてる）

すまぬ。マリアナ。すまなんだ。お前に何度も非度いことをした。がなにもかも判ったよ。

お前は今日生れた。今日から人はお前を愛さなければならない。

お前はわしを父親として慕ってくれるのか。

お前はわしを好いていてくれた。

不思議だ。なぜいまゝでわしはお前を可愛がらなかったのだらう。

マリアナ お父さまが私にお詫びになることはありませんわ。だまそうとしていたのは私なんですもの。さあお父さま、お立ちになって。お願いですわ。跪いていらつしやると私、気狂いになりそう。

アルバロ お前のやろうとしたことは當然なんだよ。気にせんでもいい。わし等の気持は一致した。そして同じ海に流れこむんぢや。なあマリアナ。二人でなにもかもやるには別におそすぎないだらう。

マリアナ 血と聖霊に誓うわ。お父さま。

アルバロ お前はわしを地獄の一步手前で受けとめてくれた。わしのやる事は全部お前がやるのと同じことだよ。わしはお前に生活を興えた。お前はそれを返えてくれた。

マリアナ お父さまをみてあげますわ。お父さまをお救ひしたかったんだもの。

アルバロ わしもあやふく連中の言ひなりになるところだった。國王……國王の御言葉……。わしを悲惨と滑稽から救ってくださいった神に讃えあれ。

お前はわしを誤解した。わしも大きな失敗をするところだった。がそれがまたわしを高めてくれるだらう。今度こそわしは自分の目的を失わんぞ。地上の物事にとらわれんようにな。真実に帰るのだ。

大きな目的のために錨を投げすて、波のまゝにするのだ。騎士團を退いたら聖ベルナベの修道院に帰ってもうもどらないつもりだよ。お前は伯母と暮すがいい。

翼があつたら墓を打ち破り太陽のあるところへとびだしたい。だが今はなにも出来ぬ。わしの傍に寄ってくれ。さあ。聖ベルナベにカルメル會の尼僧院がある。

マリアナ 私を愛して下さる人になにも出来ないけど……。

アルバロ 実際に祈ることが出来る。

マリアナ おゝ。天主さま。私が入りの暖い手の中に居た日々……。

アルバロ キリストの腕の中に眠るのだ。そして神の深い胸に身をかくそう。

マリアナ 『御身の御手の中にわが身をゆだねたてまつる』。

アルバロ 人は他人のよろこびを信じまい。

マリアナ なにも。すべては違つて来ますわ。

アルバロ 動けるものはみな動く。

マリアナ 不意になにも動かなくなります。

アルバロ 今夜三時。イスパニヤのすべての修道院で男と女が祈るだらう。その時、もう一度言ってくれ。

マリアナ えゝ。お父さま。

アルバロ と言うのはお前は犠牲だから。

寛大な春はいつめ犠牲になるがそれは本物でない。お前は自分を犠牲にかける。

マリアナ。

マリアナ はい。お父さま。

アルバロ 涙を流してはいけない。戦ひはすべて利益を吹きとばすのだ。そのつらい戦ひのないところに贖罪はない。

マリアナ 泣きたかったらあとで泣きます。デイエゴみたいに自分の鎖に接吻をして靜かにねむります。

アルバロ あの小忤。ベルナルの息子のことは？

マリアナ あの方が倅せでありますように。あの方を諦めなければ私の犠牲は完全ではありません。

ません。いつまでも愛し合えるものではありません。

アルバロ 何がお前を愛させたのか。お前は男の愛を知らぬ。わし等の血に別のものが混ってはいらない。お前を腕に抱く男はいないのだ。子供も。誰もわし等を裏切り、汚すことは出来ぬ。わし等で血は絶える。最後のものだ。なにもない。なにもない。

マリアナ 私は……。

アルバロ 神は何も望まずお求めにもならぬ永遠の静けさだ。何を望んでもいかん。

使徒達に現われた火の焰のような雪が降っている。雪は騎士團の聖霊御降臨だ。

彼は壁から大きな白い騎士團の外套を下ろし、手をマリアナの肩に置いて足までくる外套を二人してかぶる。

お前の肩の上の手でわしはお前を騎士にする。さあ、恥辱のない國へ^た発て！ 鷲の翼をもつて。わしのちっちゃい騎士。

わし等の旅はどんなか知らぬ。が新大陸は下劣な妖怪。

マリアナ 死ぬために、心と愛のためにたちましよう！

アルバロ 生きるためにぢや。それに死んだ人や生きている人のためにのう。

影がこくなる。マリアナは手を組み合わせ胸の上に。二人をつゝんでいる外套の白さだけが残る。

硝子戸のむこうに雪がだんぐと降り出す。

アルバロ 永遠に。

マリアナ 永久^{とわ}に。

アルバロ 天主よ。天主。

マリアナ なんと静かさ。雪の静かさ。アヴィラでこんな静かさを感じたことはなかったけど、地上に私達二人しかいないみたい。

アルバロ アヴィラ？ 町か？ 土地か？ まだ地上のことがみえるのか。雪の下に埋れてしまったのぢやないか。白い外套^{マント}に身をかくしたのが理れたのぢやて。

マリアナ 雪。雪。水の中の船みたいに雪の中に埋まった城。も二度と現われないわ。雪はこの國をのみこむ……のみこむ……この國はもうない。

アルバロ 前から判っていたことぢや。この國はない。そうぢや。イスパニヤは亡びた。だ^だがわし等がすぐえる。禮をするだけでな。なしとげられる。

マリアナ　すぐわれ、なしとげられる？

お父さま。みんなもう動かないものになったわ。

アルバロ　わが血の血潮。わしより秀れたもの。わしはお前を夢みている。

マリアナ　おゝ。黄金のばら。獅子の面。おもて蜂の面。おもて私の心がとらえている尊いものの前に
跪いて。

アルバロ　高きにまで昇れ、昇れ。もつと早く。飲め。飲め、聖なる益を。高きに昇れ。

マリアナ　のみました。これこそ、いと高きもの。

アルバロ　いとよきもの、いとよきもの。

マリアナ　唯一の必要なものを私、知っています。お父さまのおっしゃったことよ。

アルバロ、マリアナ（一緒に）

唯一の天主よ……………。

——幕——

*旧字やルビの表記は可能な限り原稿のままとしています。
明らかな誤字・脱字等は修正しました。（井上事務所）